
Reset

聖

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e s e t

【Nコード】

N 0 7 7 8 W

【作者名】

聖

【あらすじ】

思えば初めからして選択を間違えていたのかも知れない。

あの日、行くべきじゃ無かった。

此処に来るべきじゃ無かった。

関わりを持つてはいけなかった。

大切な人なんて二度と作るべきじゃ無かった…

後悔したって戻りはしない。失ったものは帰っては来ない。

失敗は成功のもと？

その結果がこれでもそんなことが言えるのか。チャンスが一回きりの失敗は失敗でしかない。何も生まない。出来れば無かったことにしたい…あの日に戻りたい…戻れない…リセットは無い。

そう思っていた…あの時までは…

但しろくな結果にならないだろう。世界の残酷さを知った今…希望は持てない…

そも、現実から目を背けた者の辿る結末なんてわかりきっていたのだから…

ある少女の記録

内容は空想、ファンタジー的なものです。文章力は相変わらずですが此方も細々と書いていこうと思います。物語的にはどんどん暗くなつていくんじゃないかなと…ただ、割と何でもありです。オリジナルなので自由度は高いので好き勝手やるかも知れません。コメディも入りますがシリアスパートの方が必然的に多くなると思われます。チートが居るのはご愛嬌と言つことで…

戦闘もメインになるかな。一番のメインは主人公の葛藤ですが…

至らない点多々ありますが、良ければお付き合い頂けると嬉しいです。

0（前書き）

プロローグなんて短いです

「やあ。気分はどうだい」

僕は彼女に話しかけてみる。

「・・・・・・・・」

彼女は余り反応を示さない。チラリと此方を見たがそれでも直ぐに顔を下げてしまう。

「…感覚が戻ってきてないのかい？まあそれなら話せなくても仕方が無いかな？」

「…あなた…誰？私に何の用？ここ…何処？」

まあ彼女にしたら『目を覚ましたら其処は見知らぬ場所だった』なんて状況な訳だし、その疑問は最もだ。

「ここは何処か…残念だけど、教えても君たちでは理解出来ないし、そもそも聞き取ることさえ出来ない。僕にだってどうやって説明すれば君達人間が理解出来るのかわからない。よってその質問には答えられない」

「…まるであなたが人間じゃない…みたいね」

ああ、その通りさ。

「人間じゃないよ。僕は。君達が形を理解しやすいようにオーソド

ツクスな姿を取っているだけさ。『少なくとも』君達には人型に見えているんだろうけど…本当の形なんて存在しないし、第一意味を為さない。ほら、僕って人によってどんな姿形なのか認識が違ったり。男だったり女だったり」

僕の説明に彼女はきよんとしている。首を傾げている姿は年相応で愛らしい少女のものだ。瞳に光が無い所以外は…

「…まだ答えてもらってないよね…？あなたが誰なのか」

「誰と言われてもね…僕って概念とか思想的なものだから一概にこ
ういうものではないよ？」

「…概念？思想？それじゃあまるで」

「そうだな…君達の言葉で言えば…『神』ってことになるんじゃないかな？」

僕がそう言つと途端に彼女の表情が険しくなった。キツと睨み付けてくる。

「ま…まあ落ち着いて。これじゃあ一向に進まないし、手っ取り早く説明するよ？僕は罪を犯した君を裁きにきた。それはOK？」

「…神には権限があるのね…人を裁く権限が…けれど…」

「罪を覚えていないんだろう？だからこの場所があるのさ」

そう…僕はこの子に罰を与えにきた。そして…

「君には罪を思い出して貰わなきゃならない。そうしないと裁くに裁けないからね」

「…見かけによらず残酷なのね…」

「無関心なだけさ。これは罪の清算では無いよ。これからのことはあくまでも君を裁くための過程に過ぎない。ほら、あの扉が見えるだろう？あの扉の向こうの部屋は君の脳に刺激を与えることで段階的に記憶を呼び起こす。君達の言葉で言えば『追想』といったところか」

彼女は僕が指差す扉へと視線を向ける。

「…どうせ決まっていたことなんだろうから抵抗はしない…けど悪趣味ね…一片に思い出す方法は無いの？」

「段階的…それもまた君の罪の重さ故の選択さ」

さあ…そろそろ出発して貰おうか。

「では教えて貰うよ…？」『藤咲 菜月』…君の罪を」

0（後書き）

本当に短いなあ

1 (前書き)

さてスタートです

誰でも小さい頃は怖いものが沢山あったと思う。夜中のお手洗いとか、夜道、宇宙人、お仕置きとかで入れられる押し入れ。後は…『幽霊』とか…お墓が怖いのは幽霊関係。大抵の人はこういうのが恐怖の対象。でも私は違ったんだ…だって、視えてたから…私が怖いもの…それは…

此処は鎖雛学院。鎖雛って言うくらいだからこの地域を代表するよな学院なのだろう。今は昼休みだ。

「ねえねえ？この間の特集番組見た？UMAのやつ」

教室では賑やかに談笑が行われている。まあ私もそんな中に一応居るのだが…に、しても”UMA”…なんてそそれない話題だろうか…話の矛先が私に向かないことを願いたい。

「見た見た！！すごかったよね！！あれ絶対UFOだよ！！」

クラス一明るいであろう『津室 美紀』という女子生徒が話に乗ったようだ。髪はツインテール。顔立ちは幼く、可愛い。なんだか不思議系に分類されそうだ。補足して置くと、私達は高等部2学年である。

「しかし、本当にUFOなんているのか？菜月嬢はその所どう思う？」

彼女は『禄肖 鞘乃。』このクラスの知性派副委員長だ。長髪で美

形で眼鏡がよく似合っている。と、いうか来ちゃったよ…全く…

「…居ないよ。UFOなんて。と…言うか、私にその手の話題を降らないでって前に言っただよね？第一そんなくだらない事を話題にするあなた達が私には理解出来ないんだけど…？」

『私』こと『藤咲 菜月』は自分の意見ははっきりと言うタイプだ。その上、時々毒舌になる。私の返答には美紀が反応した。

「おお～！！キツパリだねえ？流石はなっちゃん！！」

そりゃあ降られりゃあ言うだろう…と言うか毒はスルーか。

「でもさあ、ちょっと怖いよね～？あ、みんなは怖いものとかある？」

美紀が即返答。

「あるある。暗い所とか」

次いで鞘乃。

「お化けとかな。菜月大先生は？流石に怖いもの位あるだろう？」

流石に…まあしょうがないか…

「おい…私が何時大先生になった？」

「だってなっちゃん頭良いじゃん？学年トップだし。夏休みは期待してますよお～？」

「ふむ。大抵の人間にとっては敵でも菜月にとっては武器…いや、友達だからな？」

…敵…か…そんなに嫌いか？あんなら。と言つか友達が宿題ってど
んだけ寂しいのよ私は…

「…夏休みは旅に出ようかな…」

『そんなあゝ！？』と声を揃えて言う一同。約一名、鞘乃を除いて。
頼る気100%か。

「まあ、それは置いて！…ほら、怖いもの！…」

美紀が話を誤魔化す。ああ、そういえばそんな話だったつけ。

「怖いもの…そうだな…強いて言えば『人間』とか…」

途端、『え？』と言う顔が並ぶ。面倒だけど説明が必要なようだ。

「ほら、人間ってやることが生々しいじゃない？戦争とか環境破壊
とか、裏取引とかは良い代表例ね。それも全部、欲望関連よ。『植
民地が欲しい』、『もつと良い環境で住みたい』、『世の中を便利
にしたい』、『もつとお金が欲しい』…ほら？全部『欲』でしょ？
そう言う時って人間は目的の為なら何だってやるの。現に、そのお
陰で地球が壊されてるんだから、正直、生きてる人間程怖いものは
無いと思うわけ。わかる？」

『まあ、これは極端なものなんだけどね？』と、付け足すものの、
『なんとなくは…』と言う声が大半。

「死人は何も喋らないの。例えば自分に絶対に誰にも知られたくない秘密があったとして、それが2名にバレていたとする。しかも片方は死んでしまったのでしょうか。死んでいる者には何も口外出来ないけど、生きてる人間には喋ろうと思えば何でも喋れる…ほら、何にも出来ない死者より、人間の方がその人にとってはよっぽど怖いもつと簡単に言えば人間関係ね。言葉一つで崩れちゃうこともあるし…得体の知れないものより生きてる人間の方がよっぽど怖いって言うのはそう言うこと」

最後を簡単にしたことで、わかってくれれば良いのだが…

「あーっ！！それわかるー！！確かに人間関係って怖いよね？」

あ、わかってもらえたみたいだ。

「難しいしねえ…相容れない人だっけ居るし…なる程ねえ」

さて、納得して貰えたし、切りの良い所で話は切り上げるとしよう。ここでさっきから疑問に思ってたことを尋ねてみる。

「…で？どうしてみんな私の机に集まっているの？」

一同、声を揃えて。手にはノート。

「宿題教えてーっ！！」

…やっぱりか…学校を終えて、時刻は間もなく夕方の6時を迎える。何時もなら剣道に行っている時間だ。大学で運営されており、私は神無月師範に稽古を付けてもらっているのだ。まあ、護身用なのだ

が…とりあえず軽食をコンビニで買って家に帰って来た私は、玄關で硬直していた…

「……………」

リビングに見知らぬ男性が座っている。鍵は掛けて行った筈なのだが…青年はこちらに気付いたらしく、にこにこ話しかけてきた。

「やあ！！僕が見えるかい？」

笑顔で話しかけてくる青年。発言は訳がわからない。バカか？バカなのか？この人。

「うん。はつきりと見えるよ？この不法侵入者さん？」

思いつきり毒を吐く。青年は流石に驚いたようだ。

「え！？本当に見えるの！？…うわぁ…凄いな君！！」

…驚いた…驚く所がまるで違う。バカだ。完璧バカだこの人。

「で？勝手に他人様の家に入って何の用ですか？単刀直入に言いますけど、出てって下さい。出来れば今直ぐ。出てかないなら警察呼びますよ？」

青年は途端渋い顔になる。目は相変わらず笑っているが…青年の容姿は異様だった。何しろ全身が真っ白なのだ。髪までが白と来た。その上冬でも無いのにマフラーを首に巻いている。…顔は悪くないのだろう…多分美形ってヤツだ。私の脅しに、青年は思わぬ返答をした。

「うーん…呼んでも良いけど意味無いと思うよ？多分、僕の姿は見えないだろうし…」

…姿が見えない？何言ってるんだこの人？

「何言ってるの？あなたここに居るじゃない？それとも自分が透明人間だとも言う気？ごめんなさい。私はその手の話は信じてないから」

青年は目の前で爆笑し始めた。お腹を抱えて笑っている所を見ると相当ツボにハマったらしい。私は笑わせるようなことを言った覚えは無いのだが。

「あははははっ！！良いとこ突いてるけど、ちょっと違うかな？」

オホンと咳きをし、青年は自慢気に話し出した。

「なんと！！実は僕、幽霊なんです！！」

……は？

「……あっそ」

私の素っ気ない反応に自身を幽霊と名乗った青年はガクツと崩れた。「ちょ…ちよっつと調子狂うなあ？驚かないの？幽霊だよ？お化けだよ？」

この青年は驚いて欲しいのか？仕方ない。ちよっとは驚いてあげるとしようか。悪い人じゃ無さそうだから満足したら帰るだろうし…

「ふうん…すごいね」

我ながらなんて感動の無い反応だろうか。そもそも驚くことが無いから、あんまり良い言葉が浮かばないのだ。

「…そつ…それだけえっ!？」

仕方ないだろ。本心を言えば少しも驚いて無いんだから…よし。この際はつきりと自分の意見を言うとしよう。

「はい。私、先程も言った通りそういった話は信じて無いんです。だから幽霊とか言われても、正直、何の感想も浮かびませんね。まあ証拠があるなら別ですが」

『証拠』と言う発言を受けて考え込む青年。間もなく答えが出たらしく…

「なあんだ〜!!じゃあ証拠を見せれば信じてくれるんだね？」

そう言うとき青年の足がカーペットから離れた。そしてそのまま宙に浮かびだす。『これでどうだ!!』と言わんばかりの笑顔を携えながら。

「…マジシャンなの？」

これまた無反応に近い私に青年はガツクリと肩を落とし降りて来る。しかし、それにもめげず…

「じゃあこれは〜？」

そう言いながら壁をすり抜ける青年。その後、『やつほ』っと言
いながら戻って来た。

「…それ、下準備があれば出来るの知ってるから。まあタネは知ら
ないけど」

また肩を落とす青年。これは流石に信じるだろうと思っていたらし
く…今度は深く考え込んでいる。

「あの…いい加減に帰ってくれないかな？さつきから幽霊だつて事
を証明しようとしてるけど…結局、用、無いんでしょ？今ならまだ
通報まではしないからさ？」

…青年に反応は無い…段々腹が立って来た。

「…帰って。悪戯するために来たなら帰って。大体、あんた幽霊つ
て話だけど…この通り触れるみたいだし」

私はぺたぺたと青年に触れる。触れたため今度は流石に気付いたら
しい。青年は冷や汗を流しながら苦笑いをしている。

「ま…まあ待つてよ？ホントに！！決定的な証拠見せるから！！今
思い付いたから！！と言うか触ることも出来るんだ…」

…懲りないなあ…この人…

「あのさ？マジで帰ってくんないかなあ？正直、やっても無駄だし、
あなたの話にも飽きてきた…」

もうこんな人に付き合い切れないよ…

「えい」

…青年がまた何かをしたらしい。はあ…もう反応するのも面倒だし…しかし、そんな風に思いながら私の目に映った光景は…

「……え…？」

何か違和感を感じた。自分の体を見る。私の体の中心に私に向かつて突き出された青年の右腕がある。手首の辺りは無い…いや、正確には見えないだけだ。何故なら腕はぶすりと私の体に突き刺さっているのだから…

「…ふえ…？……」

何これ…どうなってるの？私の体にまちがいなく青年の腕が突き刺さっている…

「………（あ…あ…あああ…）」

するり…

青年は更に腕を突き出してくる。腕は音も無く私を貫通した…

「……………」

声が出ない…言い知れぬ恐怖が襲ってくる。間違いなく腕は私を貫いている…だって…確かに感じるのだ…その存在を…私の中に在る違和感を…背筋がぞくりとする。私の中の何かが悲鳴をあげた…そ

「わゝ あーっ！？待って菜月ちゃん！！」

クッションが駄目なら渾身の一撃をぶつけるまで！！

「これ以上私を…！！」

『…狂わせるな…！！』

ずばあああん！！

「ぼっーんっ！？」

青年に思いつきり拳をねじ込む。吹っ飛ばすために…自分に制限・リミッターをかけるために…直感的にリミッターをかけなきゃいけないと感じたのだ。…青年は驚く程軽くぼーんと吹っ飛んで壁をすり抜けていった…

「…はあ…はあ…はあ…はあ…何なのよ…あれ…何で私の名前を…」

私はその場にへたり込んで暫く何も考えられずただ…ただ泣いていた…理由は自分でもよくわからない。ただ単に怖かったのか…背筋に悪寒を感じたが…それとも、自分の主義・ココロをめちやくちやに壊されるような気がしたのか…可能性としては後者だと思う。私は幽霊とか宇宙人とかそういった『非現実的なもの』に恐怖は感じないから…感じた恐怖は…生々しかった気がする。そのクセしてどこか得体が知れなくて…矛盾しているのだ。そして…自分が壊されてしまう気がした…あ…怖かった理由なんて簡単じゃないか……要するに私は『自分が嫌いなクセに自分が壊されるのは怖かった訳で

ある。なんて…滑稽…

「ほんと…無様…」

無意識に、私はそんな言葉を呟っていた…

1（後書き）

先は長いけれどやっと始まった感じですね。まだ触りですが…

2 (前書き)

やっと更新です

翌日、土曜ということもあり、暇を持て余した私は、特に何をするでもなく部屋にこもっていた。

冷蔵庫の食材もストックはあるので買い物に出る必要性も無し。

更にそれ程オシャレに興味があるわけでは無い為、街にも出ない。

これだけ聞くとつまらない人生に聞こえるだろうが…此処に来る前に比べればこういった平穏な時間さえ愛おしく感じる。

ただ、何も考えていないというわけではない。

「・・・・・・・・」

結局、昨夜のアイツは何だったんだろう？

思えば格好も今風…とは言えなかった。男性物の袴という出で立ち…それが良く似合っていて、まるで、戦国時代の武將を思わせる凛々しさがあった。実際に武將にあったことは無いけど。

一番引つ掛かるのが彼の言う『幽霊』という言葉。

「そこが一番胡散臭いのよね…」

幽霊。実に非科学的だ。私にとっては未確認飛行物体とか未確認生物とかと同じ位信じがたいものである。

一度気になり出すとこれがどうも気になって仕方ない。

そういえば今日も来るんだろうか？

「…問い詰めて正体を暴けばスッキリするのかな？」

私は思案しながらチョコレートプレッツェルを一本、くわえる。これは私のお気に入りのお菓子。何より手が汚れないのが良い。

毎月適当に様々なフレーバーを買い溜めしてたのだが、結局スタンダードに落ち着いてからはこのフレーバーしか食べていない。

「…ただ…もしこれからも来るのなら…」

毎回突き返すのは非常に面倒くさいのではないか…？

「…まあ聞きたいこともあるし…」

勢いで『二度と姿を現すな』位言ってしまった気がしないでもないのだが…

もう一度彼に合わない限りこの疑問を解決するのは非常に難しい。

「会ったことも名乗ったことも無いのに名前を知ってた…更には家まで知ってた…」

そういえば体の中に腕が埋まるってセクハラになるのか？

いや、仮にセクハラにあたるとしてもどうやって説明するんだ？

『この人の腕が体の中に入ってきたんです!!』

誰が信じるんだよ。そんなの…

…気分転換が必要かもしれない。

「こついうのはゆっくり考えるべきなのか…?でもあんまり長くあんなのと関わるのはやだな…」

そんなことを思いながらドアノブを回すと

「ひゃあっ!?!」

突っ立ってた。

目の前に。

「あははっ、面白い声だね。菜月ちゃん」

私は驚いて尻餅を付いてしまった。

「なっとなな何でドアの前に突っ立ってんのよ!!」

「…?何でって勝手に入ったら不法侵入ってやつになるんでしょ?第一君が言ったんじゃないか」

「インターホンがあるだろうがっ!!」

私の言葉に青年は首を傾げる。

「インターホン？それより立った方が良いんじゃないかい？下の着衣が見えてるよ？」

「にゃあっ！？」

私は慌てて隠すとへたり込んだまま青年を睨み付ける。顔が熱いの
で恐らく真っ赤だ。というか何で今日に限ってミニスカートなのよ
私っ！！

「…前世はネコ…？」

「黙れ。セクハラ魔」

「あはは…セクハラ魔とは酷いなあ…そもそも今のは君が勝手…に
…」

私の冷たい視線に殺意を感じたのか青年は黙り込む。

「…何の用よ？」

二回も来るってことはそれなりに理由があるんだろう。

「ん？ああ、何の用って…昨日は追い出されちゃったからさ」

「…それで？」

私は未だに足に力が入らないため、へたり込んだまま青年を見上げる。
こうやってみると更に背が高く見えるな。

「最近、嫌な夢を見るんだ。とても怖い夢でね」

「此処は人生相談室ではないわけだが」

「あははっ♪確かに。でも人生相談ってわけじゃ無くてね、夢の中では君は煌びやかな振袖に羽衣を着ていて、まるで一国のお姫様みたいなんだよ。そして僕は君を守る従者という立場らしくてね」

「…うん。やっぱり帰っ」

「今まで段階的に見てたんだけど、先日、君に似たお姫様が死んだ…目の前でね。夢なのにさ…僕にはそれが現実のように悲しくて…そしたら、今度はこの部屋の夢を見た。勿論居たのは君だ」

……………

「…僕、記憶が無いんだ。昔のこととも自分のことも名前も…何も覚えていないんだよ。けれど…もしこの夢が現実で…これから見る夢が未来だとしたら…」

「もういい…やめて」

私は青年の話を遮る…

「…記憶喪失つてのは本当…？」

私が尋ねると青年は頷いた。

「…私もなの」

「え？」

「記憶喪失…中学までの記憶が無いの…小さい頃の記憶は無くなっていくものってのはわかってるんだけどさ…けど、名前まで忘れる…なんてこと、あるわけ無いじゃない？」

「菜月ちゃん…」

私は彼から視線を逸らしながら話を続ける。

「わからなかったっていうのよ…自分の名前も…それまで何処に居たかも…姉さん達がいなかったら…きっと家族のことすら忘れていたんじゃないかって…小さい頃のこと思い出せたのは母さんのこと位…それだけでも私には充分。同時に虚しくなっただけだね」

「お母さんのことを思い出せたのに…？」

「…もういないから」

「…あつ…と…えーと…そのっ…」

青年はあたふたと見てわかるように慌て始める。視線を彷徨わせ、私を見ようとしない。

「…何慌ててるのよ？聞いたことなら別に気にしないから落ち着いて」

私の言葉に青年はバツが悪そうに「本当に…？」と確認を取る。

私はと言つと

「と言うか…何でさつきその反応が無いのよ？」

と寧ろ別件で反撃に出る。

「…さつき…？」

っ！？この男…

「…みつ見たでしょ？ついさつき！！」

「見た…って？」

この男っ！！

「だからっ！！下着よ下着っ！！」

「した…ぎ…？」

ぷっつん。

「言わせる気かお前はあつ！！何？私を辱めたいの！？女の子に何言わせようとしてんのよ！！この変態！！H・A・N・T・A・Iで変態よ！！わかった！？」

「おおっ！？英語だ！！菜月ちゃん頭良」

「ローマ字だバカ！！」

私の剣幕に流石の変態も後退りをし始める。

「ととととにかく…落ち着いて。ね？」

こいつとはこれ以上口も聞きたくない。私は無視してドアの鍵を掛けるとアパートの階段を降りる。

「あつあれっ！？どこ行くのっ！？待ってよ！！まだ話はっ！！」

「鎖離、南地区自宅近所」

私の住むこの鎖離は一言で言ってしまうは大都市である。日本という国でも正に中心とも言える程に発展し環境にも配慮した地域だ。但し一概に住みやすいとは言えない。

それを言うのも

「最近増えたよねーエクシード犯罪」

「報道される度に寒気がするよね。身近で起こってるって考えたら…そんなに大騒ぎにはならないのが不思議だけど」

「マンネリ化ってやつ？頻繁過ぎて感覚が麻痺しちゃってんじゃない？あたしら」

そう、エクシード。

その意味は常識の枠を越えるということと異能者達の実力の総称だ。但し超能力とは一線を置かれており、別物と捉えられている。

そのような能力を悪用する犯罪を総称してエクシード犯罪と呼ぶ

のだ。中には凄惨な事件もあり、悲惨過ぎて報道を見送られる事件すらある位だ。エクシード所有者が相手となると警察では歯が立たないことがままある。

ならどうするかと作られたのが『自警団』だ。

仕組みは至ってシンプル。『目には目を。刃には刃を』だ。

自警団にはエクシード所持者を選出するのである。その為、所属している者はエクシード所持者が殆どでその選抜には厳しい審査が行われるのだ。

「でもあたしエクシードは欲しいけど自警団にはなりたくないなあ
」

「同感。んで、どんなエクシードが欲しいの？」

「お金持ちになるエクシード!!」

「無いって。そんなの」

「考え様によつてはあるよ」

学生二人はそんな話をしながら携帯電話を弄って笑い合っている。

私はと言うと、椅子に座ってバスを待っている所だ。

件の青年は私の無言の抗議にも関わらず、ついてきている。

私は無言で彼も何も言わない。

何故彼まで無言なのかはわからないが（気を遣えるやつとは思えないし）私としても好都合なので放っておくことにする。

程なくしてバスが到着したのだが…

「おおっ！！バス来たバス来た！！」

子供かお前は。

バスが近付くにつれてはしゃぎ始める青年。

バスが目の前まで来て停車すると、私は椅子から立ち上がり車内へと上がる。

青年もてっきり入って来ると思っていたのだが…

「……………」

青年はペタペタと車外からバスを触りまくっていた。珍しいものに興味津々の子供みたいだな。あれ。

「あっ！？閉まっちゃった！？」

バカだ。

バスは焦る青年を置き去りにして走り出す。

青年はどんどん遠ざかっていき…見えなくなった。

「…解放されたかな」

私は座席で胸をなで下ろすと深く重い溜め息を吐く。

窓からは住宅街から市街へと移り変わっていく景色が見える。本来、様々な店が建ち並ぶ筈の鎖離の街並み。

一瞬の浮遊感。

そして、私の視界は暗転した。

「鎖離中央区事故現場」

目が覚めると私はバスの車外にいた。

正確には担架の上だ。頭を打ったのか少し頭が痛い、腕も足も動くので他には特に外傷は無さそうである。

視界にはパトカーやら救急車やらが映っている。それとあの車は…

「お？目が覚めたようだ。お嬢さん？」

中年…と言うにはまだ早い男性が話しかけてきた。

「…あ…えーと」

「兄貴だ。修代志くんの後輩なんだから遠慮しなくて良いんだぞ？」

この兄貴こと兄貴さんは（本名は不明）鎖離でエクシード専属自警

団に勤めている男性だ。先輩の上司ということもあり、私も何度か会ったことがある。

と言うかここ最近は頻繁に会っている。

それを言うのも…

「君、今月に入って何回目だ？」

「…はは…これで三回目…でしょうか…」

そう…今月に入ってこの手の事故に遭うのはこれで三回目だ。

一回目はタクシーが急に突っ込んで来た。間一髪で私には当たらなかったが、運転席がひしゃげてタクシーのドライバーは亡くなったそう。これは単なる運転ミスと判断され事故として処理された。

二回目はコンビ二に軽自動車突っ込んで来た。運転手以外は怪我人が数名出た位だったが当の運転手はシートベルトを着用していなかったらしく衝突の衝撃で、フロントガラスに頭を強打し、亡くなったそう。これもアクセルとブレーキを間違った為に起こった事故と処理された。この時は偶然、先輩と兄貴さんも居合わせていた。だからこれで兄貴さんに会うのは二回目だ。

「今回も事故…ですか？」

「だろうな。やれやれ…君も災難」

「嘘」

私の言葉に兄貴さんは面食らったように困惑する。

「だったらどうしてこんなに早く自警団が対応してるんですか…？」

兄貴さんは冷や汗を流しながら唸る。

「…んー…やっぱり君、要注意人物なのかもな…本来ならここでポ
ンッと返答が浮かぶ筈なんだが…」

「…答えが浮かばない位…普通ですよ。追い詰められれば」

「…そりゃあそうなんだが…オレの場合、そういう時こそ真価を
揮するっつーか…」

ああ、なるほど…

「要はそういう類のエクシードなんですネ」

「…まあ…オレらが来てるのは一応だ……検証してみないと何とも
…な？」

「……………」

「あの…そろそろ検査に向かいたいんですが」

気が付くと病院の方が申し訳なさそうに立っていた。

「おう？ああ、こりゃ失礼。そんじゃあな。お嬢さん」

「…はい。また…」

救急車が走り去っていくのを見つめながら兄貴は煙草を加えて火を付ける。彼は一度灰に取り込んだ煙を吐き出すとポツリと呟いた。

「『答えを導く者』が効かない人間…か…」

彼のエクシードは『答えを導く者』…どうしようと覆らない事柄以外答えが出せない筈は無い…

だと言うのに彼女に疑問を投げかけられると不思議と答えが出て来ないのだ。

「…やっぱり普通じゃ無えよなあ…あの子」

2（後書き）

次はいつ頃でしょうね…

#3 (前書き)

お話しします

#3

〔鎖離・病室〕

救急車で病院まで運ばれた私は病室のベッドの上にいた。まだぼんやりしているのか白塗りで冷蔵庫付きの棚にテレビしかない殺風景な病室の景色は霞んでいる。
と、そこへ、

「はあい」気分はどう？」

眼鏡でスタイルの良い女医が笑顔で私に話しかけて来た。見知らぬ人物ではない。と言うか私の主治医だったりする。

因みに彼女の名前は…知らない。

「悪いに決まってるじゃないですか。先生。後、不便なのでいい加減名前教えて下さい」

この医者じゃ無かったらモデルが芸能人でもやってそうな美人女医…確かに私の主治医なのだが…にも関わらず

「だーめ。乙女のヒミツを暴こうなんていけない子ね？」

この通りわけのわからない理由で教えてくれないのだ。因みに、私の通う学院の保健の教師も務めていて通称『保健医』の愛称で親しまれている。

「と言うかなんで先生がここに？」

「愛しの菜月さんの危機に私が駆けつけないでどうするのよ！―駆けつけないで何が」

「とりあえず『愛しの』は要らないと思います」

冷めた目で告げる私に対し、彼女は

「まあ！―菜月さんってば本当にツンデレね？照れなくても良いのにいゝ」

「照れてません」

「菜月さん冷たい！？でもそこがいいっ！―」

ダメだ…この人。

「で…？私は何時解放されるんですか？」

「自己を解き放つのね？菜月さん！！大丈夫よ。先生が受け止めてあげるわ！！さあ遠慮せず私の胸に」

「グーでいきますよ？」

流石に身の危険を感じたのか先生は医師の顔に戻る。

「あなたの精密検査は何時も通り私が行う。異論は無いわね？」

「どうやって話を取り付けたかは知りませんが、その方が良いのは確かですね」

「まあ、私としてはあなたを一般の医師に診せるわけにはいかないしね」

これは彼女なりの主治医としての意地もあるが…他の理由もある。

「丁度定期検診も近かったし好都合よ。薬も出しとくわ」

彼女はドアに錠を掛けると手近な椅子に座り準備を始める。

「…まあ、良くなってることは無いと思いますよ。多分」

「私が居る限り…あなたを死なせはしないわ。絶対に」

〔鎖籬・自警団事務所〕

自警団では数時間前に発生した事故の調査が行われていた。この手の事故はこれで三件目。しかも短期間ともなるとただの事故として処理するには不可解な点が見えて来る。

「此処まで来ると…流石に事故とは思えないな…」

自警団所属の大学生、『神無月 修代志』は他のメンバー同様、事故に関しての調査に参加していた。

三件の事故には妙な共通点がある。

一つ目、死亡推定時刻の矛盾。運転手は見るも無惨な姿になった者もいれば、余り外傷が見られない者もいた。惨い姿になった者は明

らかにそれが死因と考えるのが普通だが、司法解剖の結果運転手は共通して、外傷は死因に関係ないことが判明した。傷が出来た時間と死亡時間が一致しないのだ。

二つ目、死因。直接の死因は三人共心臓破裂が死因と判明したが、それにしたって立て続けに三人が心臓破裂などという偶然があり得るのだろうか？

そして三つ目…これが俺にとって一番気になるのだが…

「全ての事故に『藤咲菜月』が遭遇している…」

それも三件目は直接の被害も被っている。これは単なる偶然か？

「…この短期間で三度も命に関わる事故に遭っている…」

何だか嫌な予感がする…

と

「よう！！調子はどうだ？修代志くん」

後ろから先輩に声を掛けられた。

「先輩、何時の間に帰って来てたんですか？」

「先輩じゃねえ。兄貴って呼べ。菜月ちゃんはちゃんと呼んでくれてんだぞ？」

「…それが何の関係が…？と言いますか何時の間に知り合ってたん

ですか？」

藤咲菜月は俺が師範を務める大学の剣道サークルの門下生である。その関係で彼女と俺とは面識があるが…先輩が道場を見に来た事は無い筈だ。恐らくは今回の事故に見せかけた事件で知り合ったのだろう。

「ちょっとな…それで修代志、この事件…お前は どう見る？」

「どうって…俺達に回ってくる案件ならエクシード犯罪かと…」

俺がそう答えると先輩は満足そうに頷き、懐から煙草を一本取り出し、火を点ける。

「今回の件、オレには心当たりがある」

先輩はそう言うのでデスクに一枚の写真を置いた。

「名前は『国木田 史熊。』通称は『Σ』だ。エクシード所持者で爆弾魔なんだが十年前にもエクシード犯罪で逮捕されてる。一年前に釈放されてるんだが…こいつの能力が生物の体の一部分を…起爆させられるってやつでな」

体の一部分を起爆…？

「…規模を抑えれば破裂程度にも…？」

俺が尋ねると先輩は頷いた。

「どうやら可能って話だ。けどよ…こいつを追うのはちょいと問題

があつてな……」

「……問題……ですか？」

「ああ……国木田のやつ2ヶ月前に自殺してるんだよ。海に身投げしたって話でな……遺体も見つかつてる」

自殺している！？

「……それじゃあ犯行は無理じゃないですか……」

俺の言葉に先輩はだが被りを振った。先輩はにやりと口元に笑みを浮かべると

「いや、仮に国木田が怨霊になつてだな………つて修代志くん？」

「ななななななんつですか？」

「いや……何か……震えてないか？君」

ギクウっ！？

「……そ……そんな事は……」

「……まあ冗談はさておきつて痛アっ！？何するの修代志くん！？」

俺は先輩に思いつ切り肘打ちをかました。

「良いから……つまりどういう……まさか？」

其処まで言ってから俺はある可能性に思い当たる。

先輩は再度にやりと笑うと

「この写真、ひよつとすると国木田本人じゃ無いかも知れないって可能性があんだろ?」

「鎖帷・国立病院」

「本当に良いの? 菜月さん」

「はい。別に目立った外傷も無いですし、病院『嫌い』なので」

私は病院の玄関先でグラマー女医と話している。無論彼女はあの主治医だ。

「ぐすん。せつかくのチャンスだったのに」

「何のチャンスだ何の」

「え? 夜になったら襲おうかと」

「精神病院行って来たらどうですか? 先生」

冗談では無く本気だから困ったものだ。

「大丈夫。クセになるわよ?」

「ちつとも大丈夫じゃないです」

私は先生の言葉に適当に返事を返す。この人にはまともに付き合っ
てはいられない。

「私、脱いだら凄」

「脱ぐな。求めて無いから」

体の調子の確認の片手間に先生の対応をしていると突然、携帯のバ
イブが鳴り始めた。

「菜月さん、携帯持ってたの？番号は？」

「あからさまに番号を聞き出さないで下さい。教えません」

私は着信画面を見ると懷に携帯をしまう。

「出ないの？」

「非通知でしたから。それじゃあ失礼します」

「あ、うん。お大事に」

私は先生と別れると、改めて携帯を取り出す。この携帯への着信は
特定の人物のみだ。

私は着信履歴を呼び出すと先頭の番号へ掛け直す。程なくして相手
が出た。

『私よ』

「ごめん…人と会ってたの」

『取りあえず状況報告から…こちらの守備は上々。眞樹も華梨も良
くやってくれているわ』

どうやら問題ないらしい。

「わかった。そのまま守備を固めて。此方は此方で戦力を集めて置
く」

『あの女は?』

「現在は動いていない…大方、高みの見物って所ね」

『菜月…ごめんね…こっちはそっちに人員を一人も送ってあげられ
ない…』

そんなこと…

「いや、寧ろ今は一人の方が都合が良いわ。元より応援は期待して
ない」

『私達みたいな組織があんな奴らに対抗するなんて…本当に出来る
の…?ましてや…あなたと戦ってまで!』

「命令は絶対…それにこれだけが…これが私達が呪縛から解放され
る唯一の方法よ」

『…強いね。相変わらず』

強い…か…

「いいえ…未だにその疑問を持ち続けていらっしゃるあなたの方がよっぽど強いわ」

私にはもうそんな余裕すら無いというのに…

ふと、前方に視線を向けると、黒いドレスを着た女性が視界に映った。

「……椿、次の連絡は早いかも知れない」

私はそう言つと通話を切る。すると、黒いドレスの女は私に歩み寄つてきた。

「全く…仮の保護者つて言つても、連絡位してくれないと心配するじゃない!」

「…っ!?!ごめん…なさい…」

「……今夜、私の部屋に来なさい」

「はい…」

「黒いドレスの女の私室」

「誰にも気取られて無いわね?」

「はい」

深夜0時、ある建物の一室。私は暗い部屋の扉の前に立っていた。

「菜月、服を脱いで此方へ」

私は言われるがままに衣服を脱ぎ、女の元へと向かう。

女は私の体を満足げに眺めるとサラサラと絵を描き上げていく。

「あなたは私の芸術…あなたの母親と私…そして卯月による合作…
彼女があなたを産み、彼があなたを壊し、私があなたを作り上げた
…」

女は恍惚の表情を浮かべると私の胸に頬を擦り寄せる。

「はい…」

「時間はかかった…彼女も彼も私を裏切ったけれど…あなただけは
違う…あなただけは私を裏切らない…」

彼女はキャンパスに繊細な手つきで色を付けていく…

「あなたは私のキャンパス…あなたに刻まれる全てが芸術…」

彼女は私の体に筆を滑らせる。

「…さて、と…例のエクシード犯罪者だけど…あの事件を知っている…
…と言うか首謀者に近い人物らしいわ。今頃になってあなたを狙
い出した理由は…」

「直ぐに狙うのは得策とは言えません…ほとぼりが冷めてからの方が支障は少なくて済みます」

女は頷くと、一枚の書類をデスクに置く。

「…彼には相応の制裁が必要ね？あなたを狙ったのだから。それも三度も」

「エクシード犯罪者となると自警団が動くと思われませんが…」

「寧ろ自警団はあなたに協力してくれる筈よ。ギリギリまで動く必要も無いわ。利用出来るだけ利用しなさい」

「現状を維持…わかりました」

女は私の左手を取るとデスクから立ち上がる。

「観て…この腐りきった世界を…」

私達の眼下には鎖離の夜景が広がっている。

「あなたはその鎖離の統治者じゃないですか？」

一瞬で空気が変わる。当人達にしかわからない感覚、切り替えの合図。

「まあ私程の者なら鎖離の一つや二つ、牛耳れて当然なわけだけだ」と

「鎖雖は一つだけなんだけど…」

「言葉の文というものよ。細かいわね」

「そう言う性格なんで」

「…自分の学院の理事長にタメ口って生徒としてどうなの？」

「好きで生徒やってるわけじゃないし…それよりもう良い？服来て帰っても」

「今夜は泊まっていきなさいな。私が許すわ」

「いえ、帰ります。少し用事もあるので」

「…そう…夜になったら襲おうと思ってい」

「冗談と受け取っておきますけど…本気だったら…私の周りには口くな大人が居ないな…」

女は訝しげに眉を潜める。

「…？それってどういう」

「あなたも彼女も同レベルってことですよ…」

#3（後書き）

段々と登場人物が増えてきましたね…キャラ提供して頂いた友人等
無くしては作れない物語です

本当に感謝ですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0778w/>

Reset

2011年10月21日16時02分発行